

フリッツ・ルフとRKD

—— オランダにおける美術研究ドキュメンテーションの一側面 ——

中村節子

1. はじめに

1998年8月16日－21日、国際図書館連盟(IFLA: International Federation of Library Associations and Institutions)の第64回年次大会がオランダのアムステルダムで開催された。筆者は専門図書館部会の下にある美術図書館分科会(SAL: Section of Art Libraries)のプログラムに参加し、日蘭の美術交渉史に関する日本の研究動向の一端について、オープンセッションで発表する機会を得た¹⁾。

そのプログラムの中で、オランダ美術図書館協会²⁾主催によるアートライブラリの見学会が、アムステルダムとハーグとで2日にわたって開かれた。

今回の出張報告を兼ねて、その時の訪問先である、ハーグのオランダ美術史研究所 (fig.1) (Rijksbureau voor Kunsthistorische Documentatie 以下、RKD)の活動³⁾と、研究所の創立者のひとりであるフリッツ・ルフ(Frits Lugt, 1884-1970)について、ここに紹介したい。何故ならフリッツ・ルフは、レンブラントの素描の研究などでも功績があるが、同時にオランダの美術研究におけるドキュメンテーションという側面からも、多くを貢献した研究者であると考えられるからである。

2. フリッツ・ルフの略歴

今日では、ドキュメンテーションという活動は、コンピュータを使つての情報の組織化や検索といった印象が強いかも知れない。しかし、20世紀前半までは、ひとりひとりの研究者が、カード・インデックスなどの方法を用いて、ねばり強い調査による情報の蓄積や分析、そして検索というドキュメンテーション活動をおこなってきた。そのひとつの典型をルフの業績に見ることができる。ここで、初めに彼の人物像に触れるのは、彼のこのような業績には、彼の性格や経験が大きく反映していると考えるからである⁴⁾。

フリッツ・ルフ⁵⁾こと、フレデリック・ヨハネス・ルフ(Frederik Johannes Lugt)は、1884年5月4日、アムステルダムで生まれた。父親のフレデリック・ヨハネス・ルフ(Frederik Johannes Lugt)は、アムステルダム市の初代公共事業部長を勤め、のちに電気局長となったエンジニアであった。母親シャネット・ベトロネラ・フェルスフル(Jeanette Petronella Verschuur)は、画家ウォーテルス・フェルスフル⁶⁾(Wouterus Verschuur, 1812-74)の姪であった。

少年期のルフには、すでに2つの徴候が見られる。それは、カタログの制作と素描に対する特別な関心である。ルフは8才の時、博物館(Museum Lugtius)の館長として自分

の部屋のドアに「館長が家にいる時だけ開閉します」と掲示し、所蔵品カタログを作成した。所蔵品は石や貝殻や蛇の皮などという子どもらしい、誰にでもありがちなものであったが、その数年後の彼の人並みはずれたエピソードは、長じての才能と業績や、“ミュージアム”というものに生涯関わることになる彼の人生をすでに暗示していたと言えるだろう。

彼はアムステルダムのヘンドリック・デ・ケイセル素描学校(Hendrik de Keyser's Drawing School)に通うが、10才の頃から学校の帰りにほとんど毎日アムステルダムの国立博物館の版画室(Rijksprentenkabinet)に通い、閉館まで熱心に作品を見ていた。12才の時、当時版画室では作成していなかった素描の所蔵目録を作成し始めた。ファン・アーケン(Van Aken)から始めた目録は、1899年の終わりにはJという文字のヨルダースの項目(Jordaens)までの955項目を終えていたが、目録に作家の略伝や素描の来歴、寸法、サインの模写まで記載していた⁷⁾という。彼は、素描に大きな関心を持っていた。将来多くの素描の目録を作成し、特に素描のコレクターとして有名になるのだが、自らもレンブラントの版画を模写したり、自画像(fig.2)や父の肖像、風景などの素描を描いていた。彼は、美術の専門家というものは、マリエット(Pierre-Jean Mariette, 1694-1774)のように自分でも素描ができなくてはならないという考えをもっていた⁸⁾という。

ルフはレンブラントに対して、深い憧憬と尊敬の念を生涯抱き続けた。1898年にアムステルダム市立美術館(Stedelijk Museum)で開催された大規模な「レンブラント展」(Rembrandt: schilderijen bijeengebracht ter gelegenheid van de inhuldiging van Hare Majesteit Koningin Wilhelmina)を見た14才のルフは、翌1899年1月8日、

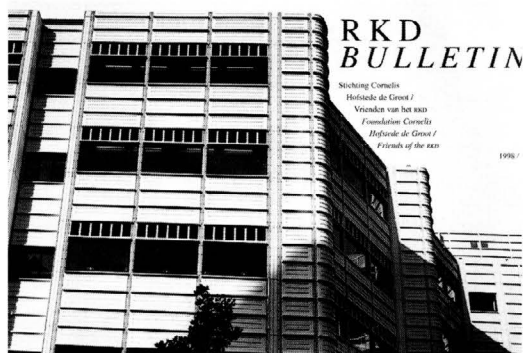


fig.1 RKDの外観 (Bulletinの表紙より)

最初の著作としてレンブラントの伝記を書き始めた。これは長く出版されることがなかったが、彼がパリに設立したクストディア財団(Fondation Custodia)の50周年を記念したルフトの素描コレクション展である「レンブラントとレンブラント・スクール」(*Rembrandt en zijn school*)の機会に英・仏・オランダの3カ国語で1997年に出版された⁹⁾。同年11月1日、デ・フリース(R. W. P. de Vries)の古書店で行われたオークションで、15才のフリッツ・ルフトは、書家であり銅版彫師でもあったコペノール(Lieven Willemsz. van Coppenol, 1599-1671)が詩を書き写したカリグラフィーを落札したが、それにはレンブラントのエッチング(コペノールの頭部のみの肖像)が付いていたという。同時にカレル・ファン・マンデル(Karel van Mander, 1548-1606)の1764年の再版の画家評伝(*Het Schilder-boeck*)も入手した。これが、ルフトがオークションの世界に進むきっかけとなった¹⁰⁾。

1901年ルフトはロンドンへ行き、6ヶ月間美術館やアートディーラー、オークションハウスなどを訪ね歩き、イギリスの画家でコレクターのチャールズ・フェアファックス・マリー(Charles Fairfax Murray, 1849-1919)と出会った。マリーは、オールド・マスターの素描についての知識を彼に授け、2人は友人となっただけでなく、後に収集家としてライバルとなった¹¹⁾。ルフトは9月にアムステルダムの有名なオークションハウス、フレデリック・ミュラー(Frederik Muller)で働き始めたが、代表のアントン・メンシング(Anton Mensing)は、彼が14才の時に書いたレンブラントの伝記を見ており、ルフトをチーフ・アシスタントに指名した。彼がここで得た知識や経験、多くの作品を自分の眼で評価し、様々なコレクターと接触し、なによりも多くのカタログ制作を手がけたことが、やがて彼が生涯をかけることになるドキュメンテーションの研究のための基となった。

彼が手がけた主な仕事は、1903年にアムステルダムの市立美術館で開催されたヤン・ファン・ホイエンの展覧会の担当者としてカタログを制作、翌年アムステルダムのプレイエル画廊(A. Preyer's Gallery)で、ヨンキントの展覧会を開き、そのレビュー¹²⁾をハームステー(F. van Haamstee)というペンネームで、雑誌*Onze Kunst*に寄せたが、それはオランダの雑誌上において初めてヨンキントについて言及された記事だった¹³⁾。また、1906年にはレンブラントの生誕300年を記念してミュラーが開催した「オランダ絵画の黄金時代」展を担当した。オークションとしては、レンブラントの素描が当時の最高値をつけた1913年5月のオランダ人の証券ブローカー、ヘセルティン(J. P. Heseltine, b.1843)が所有していたオランダの巨匠による素描コレクションと、同年6月にパリでおこなわれた3世代、およそ100年にわたる有名なステーンフラフト家(Steengracht Collection)のオランダ絵画コレクションのオークション — ころうじて数点がマウリッツハイスなどのオランダの美術館に入った — のカタログ制作が有名である。

ルフトは1910年にヤーコバ・クレフェル(Jacoba Klever, 1889-1969)という、石炭で富を築いた産業資本家の娘と出会い結婚するが、1935年には義父が死亡して、妻は莫大な資産を相続した。1915年ルフトはミュラーを辞めて、研究や調査活動を始め、また素描を中心とした作品の旺盛な蒐集を開始する。彼はミュラーを去るまで本格的な蒐集を始めなかったという。ルフトが蒐集した素描はおおよそ6,000点で、そのうち17世紀オランダとフランドルの素描はおおよそ2,500点にものぼるが、重要なコレクションは妻が遺産を相続する以前にすでに形成されていた。それを可能にしたのは、第1次大戦直後、多くの重要なコレクションが売りに出され、価格が下がったためであった。1917年のルドルフ・ゴールドシュミット・コレクション(Rudolf Goldschmidt, ca.1840-1914: sale, Frankfurt)や1919年のピーテル・ランヘルホイゼン・コレクション(Pieter Langerhuizen, 1839-1918: sale, Amsterdam)など、重要なコレクションを落札する。同年彼のコレクションのうち最も素晴らしいと言われるレンブラントの《出産を待つサスキア》(*Saskia's Lying-in Room*: Institut Néerlandais所蔵 inv. no.266)を入手した。最後にレンブラントの《井戸端のリベカとエリエゼル》(*Rebecca and Eliezer at the Well*: Institut Néerlandais所蔵 inv. no.9629)を買ったのは1970年の6月25日で、死の数週間前までコレクションを発展させ続けていた。こうした、素描コレクターとしてのルフトの豊富な知識と経験は、次に紹介する彼の業績に大いに反映したと考えられる。

第2次世界大戦が勃発した1939年、パリにいたルフト夫妻はスイスへ移った。コレクションのうち重要なものはスイスへと移動させることができた。1941年には米国に渡り、終戦を迎えるまでオハイオ州のオバーリン(Oberlin)に住むが、

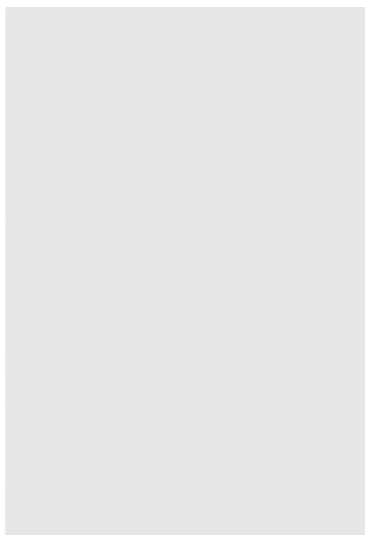


fig.2. フリッツ・ルフトの自画像 鉛筆・紙 25.3×17.6cm 1901.

ここでも書物や写真を大量に購入した。ルフトは、米国で、コレクションを美術館に遺贈して国家に貢献するプライベート・コレクターたちに大きな影響を受けた¹⁴⁾。戦後オランダに帰国したルフトは、ハーグか、ハーレムに彼らのコレクションを収蔵する美術館を求めた。50年間に彼が蒐集し続けた作品はおおよそ9万点にも及んだ。ルフトのコレクションと言えば、素描や版画という印象が強いが、油彩画、稀覯畫、画家の自筆の文書、ポートレート・ミニチュア、インドの細密画、メダル、古代美術、中国の磁器や家具にいたるまで多様だった¹⁵⁾。しかし結局、オランダでは実現せず、彼は1947年10月にクストディア財団を創設し、10年後の1957年にオランダ政府と協力して、パリにオランダ研究センター(Institut Néerlandais)を設立して彼のコレクションを移した。彼はここで、数々のオランダ美術の展覧会やコンサートを開催し、ライプザリの収蔵範囲をオランダ文学にも広げ、美術・音楽・文学におけるオランダとフランスの文化交流に大きく貢献した。ルフトは1970年7月15日、レンブラントの誕生日と同じ日に亡くなった。

3. ルフトの業績

〈ドキュメンテーション〉という用語そのものを、ルフトが使うことはなかったにしても、彼の調査・研究の方法において、情報の組織化や検索システムの構築というコンセプトとしての〈ドキュメンテーション〉のようなものは十分に意識していたと考えられる。ルフトはその生涯にわたって、ルーヴル美術館およびパリの公共機関が所蔵する素描の目録や、ユニオン・オークション・カタログの制作を継続し、このようなレファレンス・ツールは、美術の基礎研究に大きく貢献した。そうしたドキュメンテーションの立場からルフトの活動を考えてみたい。

Les marques de collections de dessins & d'estampes. Amsterdam: Vereenigde Drukkerijen, 1921; Reprint, San Francisco: Alan Wofsy Fine Arts, 1975. (fig.3)
Supplément. The Hague: M. Nijhoff, 1956; Reprint, San Francisco: Alan Wofsy Fine Arts, 1988.

1921年にルフトが出版したこのレファレンス・ツールは、コレクターやアート・ディーラーばかりではなく、美術研究者にも大いに役立つものであった。古い素描や版画の場合、作品に所蔵を示すスタンプやエンボスやインクでの手書きなど、何らかの小さなマークやサインが入っていることが多かった。そのマークは作品の来歴やオーセンティシティなどを証明することになるのである。したがってマークがあるか否か、どんなマークかということが、作品の価値に大きく影響した。こうしたマークは17世紀初頭から増え始めていたので、コレクターのマークを調べる事典の必要性はすでに18世紀から認識されていたが、ルフト以前には作成されなかった¹⁶⁾。この事典は、マークの形態別に大きく分類され、コレクターのイニシヤ

ルやモノグラムあるいは名前のアルファベット順に配列された項目ごとに、マークの図版、コレクターの生没年や略歴、そのコレクションの内容が紹介されている。また、所有者の死などによって売りに出された場合は、セールの年月日や場所、鑑定人の氏名あるいは扱ったオークションハウス、価格、カタログがある場合カタログに載ったロット・ナンバーなども記載している。巻末にはコレクター、作家、アート・ディーラーや出版社など所有者名のアルファベット順のインデックスを付している。この2冊の本で彼が分類したマークの数は、3027種類である。

Répertoire des catalogues de ventes publiques, intéressant l'art ou la curiosité. The Hague: M. Nijhoff, 1938-1964.

彼の業績の偉大さを一番示すのは、全3巻からなるこの目録であろう。これは、1600年から1900年までに行われたオークションのカタログ約22,000冊を調査して、オークション情報を時系列に累積したものであり、第1巻(1600-1825年)は11,000件、第2巻(1826-1860年)は14,900件、第3巻(1861-1900年)は32,800件で、総数約58,700件が扱われている。項目は、オークションの開催年月日順に配列され、開催場所、コレクターや作家など所有者の名前、作品、ロット・ナンバー、オークションハウス、記載されているカタログのページ、そして、それぞれのオークション・カタログを所蔵している図書館(アメリカも含む)である。巻末にはコレクション名のインデックスと、図書館のリストが付してある。ルフトの死後、1901年から1925年までの89,500件を取りまとめた第4巻が1987年に刊行された。また現在、第1巻(1600-1825年)、第2巻(1826-1860年)は、マイクロ資料¹⁷⁾として販売さ

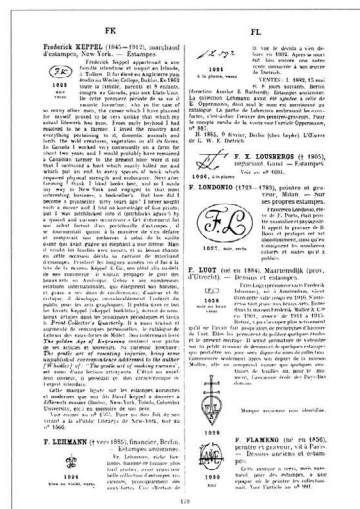


fig.3. *Les marques de collections de dessins & d'estampes.* Amsterdam, Vereenigde Drukkerijen, 1921. より
 右側上から4番目 (no.1028) がルフトのマーク。

れている。

1922年、ルフトはフランスの教育・芸術省からルーヴル美術館が所蔵するオランダとフランドルの素描の目録作成を任命された。この仕事は、ルフトによって1968年までおよそ半世紀近くにわたって継続された。

Musée du Louvre. *Inventaire général des dessins des écoles du Nord, publié sous la direction de L. Demonts: École hollandaise*. 3 vols. Paris: A. Morancé, 1929-1933.

最初の2巻は1929年に出版され、第3巻は1933年に刊行された。第1巻と2巻は画家の名前(姓名不詳の画家も含む)のアルファベット順。第3巻は模写も含むレンブラントとレンブラント・スクールの素描だが、特にこの第3巻は、彼の業績の中で最も学術的なものであるとの評価を受けている。ファン・ヘルデルは、「ルフトは調査のためにヨーロッパ中の版画・素描室を巡ったばかりではなく、レンブラントのものとされている6,000点にもよる素描について、あらゆる文献を調べ、素描と版画とを関連づけ、レンブラントの素描同定のための研究資料(*apparatus criticus*)を確立した」¹⁸⁾と述べている。

Les dessins des écoles du Nord de la collection Dutuit au Musée des Beaux-Arts de la Ville de Paris(Petit Palais). Paris: A. Morancé, 1927.

ルフトはルーヴル美術館のみならず、パリにある公共機関が所蔵する素描の目録を作成した。最初に刊行されたのは、1927年で、ブチ・パレが所蔵するデュテュイ家コレクションの素描目録である。

Bibliothèque nationale, Paris. Cabinet des estampes. *Inventaire général des dessins des écoles du Nord*. [par Frits Lugt, avec la collaboration de J. Valley-Radot.] Paris: Éditions des Bibliothèques nationales de France, 1936.

パリ国立図書館が所蔵する、オランダを中心とした、フランドル、ドイツ、イギリスの画家の素描目録。レンブラントやデューラーなどの著名な画家の素描が含まれている。

Musée du Louvre. *Inventaire général des dessins des écoles du Nord: publié sous les auspices du Cabinet des dessins: École flamande*. 2 vols. Paris: Musées nationaux, 1949.

戦争で中断されていたカタログ作成が再開されて、最初に出版されたルーヴル美術館所蔵の素描目録。

École nationale supérieure des beaux-arts. *Inventaire général des dessins des écoles du Nord*. Paris: H. Laurens, 1950

エコール・デ・ボザールが所蔵する素描目録。

Musée du Louvre. *Inventaire général des dessins des écoles du Nord: publié sous les auspices du Cabinet des dessins: Maîtres des anciens Pays-Bas nés avant 1550*. Paris: Musées nationaux, 1968. (fig.4)

ルフトは晩年にもルーヴル美術館の目録を作り続け、最

後の素描目録を刊行し終えたのは84才の時だった。この目録では1550年以前に生まれた画家の素描722件を所収。彼が出版したルーヴル美術館所蔵のオランダとフランドルの素描目録は6冊、パリ国立図書館、ブチ・パレのデュテュイ家コレクションやエコール・デ・ボザールなど、パリの公共機関所蔵の素描目録を合わせると総数は9冊となった。

もちろん、彼の著作はこれだけではない。たとえ彼は、レンブラントが描いた素描やエッチングの風景に現れる場所の同定を試みた著作(*Wandelingen met Rembrandt in en om Amsterdam*. Amsterdam: Van Kampen, 1915)を出版するが、1920年にはその増補版がドイツ語で出版されており(*Mit Rembrandt in Amsterdam*. Berlin: B. Cassirer, 1920)、現在でも基礎文献となっている。また、ドイツに所在するオランダの画家の素描の調査も重要な文献とされている。("Beiträge zu dem Katalog der niederländischen Handzeichnungen in Berlin." *Jahrbuch der Preussischen Kunstsammlungen*, vol. 52, 1931, pp.36-80) ルーベンスやブリューゲルの素描に関する著作もある。96点におよぶルフトの全著作目録は*La Revue du Louvre et des musées de France*(21 année, no.1, 1971, pp.51-54)に掲載されている。

4. オランダ美術史研究所(RKD)

ルフトのような研究者のねばり強い調査、たゆまぬ努力が、このようなレファレンス・ツールを生み出し、美術研究の資となった。もちろん、このような研究活動をしてきたのは、余り多くはないがルフトだけではない。20世紀に入ると、このようなドキュメンテーション活動は、組織によってもっと大規模な活動となり、対象とする情報も広範で、コンピュータ

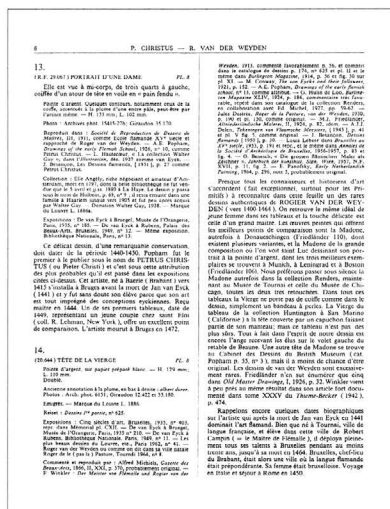


fig.4. *Inventaire général des dessins des écoles du Nord*. Paris: Musées nationaux, 1968. より

を導入した、よりシステマティックな形で受け継がれていく。ハーグのRKDは、そのひとつのモデルと言えるだろう。しかし、下記に述べるように、個人の研究者が作成し蓄積してきたインデックスカードが、RKDのドキュメンテーション活動でも基礎になっているのである。

RKDの特徴を述べるために、ここで見学会で訪れたアムステルダムの主なミュージアム・ライブラリが所蔵している資料の特徴を簡単に紹介したい。

・国立博物館：

中世～18世紀美術の絵画・彫刻・版画・工芸などを中心に図書約10万冊、オークションカタログ約3万冊を所蔵。

・市立美術館：

19世紀～現代美術の絵画・彫刻・版画・工芸・デザイン・写真などを中心に、図書約8万冊、展覧会カタログ・所蔵品カタログ12万冊、逐次刊行物160種、古い雑誌1,000種を所蔵。特にカシ米尔・マレーヴィチについては、1913年から27年までのマレーヴィチ自身の手稿やタイプした原稿などを含むアーカイブを所蔵している。

・ゴッホ美術館：

もともとはゴッホに関する資料を収集していたが、現在ではゴッホと社会的・文化的背景や他の作家との影響関係を研究できるよう、1820年頃から1920年頃までのオランダとフランスを中心とした西洋の作家に関する資料にも力を入れている。特にゴッホが読んだ本、およびゴッホの手紙に出てくるすべての本について、当時の版を収集している。蔵書数は図書約2万2千冊、逐次刊行物約60種。ドキュメンテーション・センターも併設されており、ゴッホや彼と同時代の作家に関する新聞の切り抜き、写真や手紙などのアーカイブを所蔵している。

・市立歴史博物館：

主にアムステルダムの歴史や、オランダの美術、工芸、博物館学に関する図書を収集している。16～17世紀の印刷本を多く所蔵。ルイケン親子 (Jan Luyken, 1649-1712; Casper Luyken, 1672-1708) のイラストレーションによるエンブレム・ブックのコレクションなど、それぞれの時代の風俗、習慣、社会、歴史に関する蔵書は約2万冊、逐次刊行物は130種。

上記に紹介したライブラリは、一般に公開しており、外部への情報や資料の提供を重要な役割として担っているが、同時に館の附属機関として、内部のキュレーターによる作品の調査研究や展覧会活動を支援する機能が常に一義的としてある。従って蔵書構成は、いずれも館の作品コレクションを反映しているので、関連の分野については詳細な情報が得られる利点はあるが、主題は限定されている。

一方、ハーグにあるRKDは、特定の分野において専門的なミュージアム・ライブラリとは役割の異なる、広範な資料を持つ総合的なドキュメンテーション・センターである。彼らの活動の目的は、1400年から現代に至るまでの、オランダを中心としてはいるが、西洋美術全般の画像資料 (写真、スライ

ド、リプロダクション、素描、版画、イラストレーションなどを含む) と文献資料 (アーカイブ、図書、雑誌、オークションカタログや展覧会カタログなど) を出来る限り多く収集して、一般に公開し、研究に資することである。収集する資料の主題は、絵画、彫刻からインダストリアル・デザインにまでおよぶ作家や作品に関する情報だけでなく、美術研究者、コレクター、アート・ディーラー、作家の加盟団体から、イコノグラフィー、美術批評、展覧会、オークション、あるいは時代的背景にいたるまで実に多岐にわたる。もちろん、スタッフのほとんどは美術研究者であり、毎年ほぼ3回発行されている *Bulletin* では、スタッフの執筆活動などの業績を毎号で紹介している。(最近インターネットで公開されている。) RKDの利用規則には、利用カード取得のために住所と氏名を登録する必要はあるが (主な目的は盗難防止)、調査が目的であれば、外国人かどうかの区別も、年齢制限さえ無く、紹介状も入館料も必要ない。

4.1. 創立者ホフステーデ・デ・フロート

RKDのこのような性格は、創立者の遺志によるところが大きい。オランダ17世紀の美術研究者として名高いコルネリス・ホフステーデ・デ・フロート¹⁹⁾ (Dr. Cornelis Hofstede de Groot, 1863-1930 以下、デ・フロート) (fig.5) もまた、美術分野におけるドキュメンテーション的研究に大変大きな貢献と成果をもたらしたひとりである。デ・フロートは、研究所を設立することを条件として、1926年 (死の4年前) に、彼が所蔵する研究資料 — 10万点にもおよぶ画像資料と、主に17世紀オランダの絵画、版画、素描に関する彼の約30万点の研究ノート、数千冊のオークションカタログなど — を国家に遺贈することを申し出た。フローニンゲンの質素な牧師の家に



fig.5 コルネリス・ホフステーデ・デ・フロート

生まれた彼は、20才の時に父を亡くし、若い頃は、美術研究を続けるための経済的困難さに常に悩まされてきたが、誰でも自由に美術研究を行うことができるような場を提供するよう国家に求めたのだ。また、彼の下では、将来著名になるドイツやオランダの多くの若い研究者たちがアシスタントとして働いた (fig.6)。例えば、エリザベト・ネールデンブルフ (Elizabeth Neurdenburg, 1881-1957)、エーミル・カウフマン (Emil Kaufmann, 1891-1953)、クルト・パウホ (Kurt Bauch, 1897-1975)、ホーデフリドゥス・ホーヘヴェルフ (Godefridus J. Hoogewelf, 1884-1963) など、中でもホルスト・ゲルソン (Horst K. Gerson, 1907-1978) は、デ・フロートのアシスタントを勤めた後RKDに勤務し、1954年から館長としてRKDの発展に貢献した。デ・フロートのライフ・ワークとなった17世紀のオランダの画家のカatalog・レゾネ²⁰⁾が完成し、最後の第10巻が刊行された時の祝賀会で、アシスタントたちは感謝を込めて、マックス・リーパーマンのエッチングによるデ・フロートの肖像画を贈った²¹⁾。1932年、RKDは一般公開のドキュメンテーション・センターとして本格的な活動を始めた。

デ・フロートから遺贈された画像資料は、ほとんどが写真であり、あとはオークションカタログや雑誌などから切り抜いた図版、またガラス板のネガティブも若干あったという。

美術研究における写真の利用は、多くの議論²²⁾を生みながらも、写真機の性能が改良され、写実性において精密さを増してきた19世紀後半から、次第に浸透し始めた。「科学的尊敬を与えるために実験的と命名されたある種の経験的原理の応用にまで、芸術史を還元せねばならぬと信じた」²³⁾ ジョヴァンニ・モレリ (Giovanni Morelli, 1816-1891) は、指や耳などの細部を観察するための手段として写真を鑑定に利用した²⁴⁾。またヤーコブ・ブルクハルト (Jacob C. Burckhardt, 1818-1897) は、写真の持つ問題性を自覚しながらも、晩年はフィレンツェやローマなどの旅行先で写真屋を探し、ヴェルフリン (Heinrich Wölfflin, 1864-1945) に写真の便利さを伝える手紙を1896年に送っている²⁵⁾。美術研究に写真を活用していたバーナード・ベレンソン (Bernard Berenson, 1865-1959) は、フィレンツェ近郊の邸宅イ・タッティ (Villa I Tatti) に、約5万冊の蔵書とともに約10万点の写真を収蔵していた²⁶⁾。マックス・フリートレンダー (Max J. Friedländer, 1867-1958) は、作品の様式研究に写真を頼るようになった傾向を嘆きながらも、記憶の補助として、あるいは、実作から引き出した結論を後から裏付ける資料としては欠かすことができない有効な補助手段であると認めた²⁷⁾。デ・フロートは、17世紀のオランダの画家のカatalog・レゾネの序文で、「公共の機関に収蔵されない絵画は、ますます世界中に散り散りになっていってしまうだろう。学生が直接作品を調査して、完全な知識を得ることは難しくなるばかりである。カリフォルニアや南アフリカやオーストラリアに行ってしまった絵画だけでなく、オークションで買った作品を世に出したがいらない所有者に秘蔵されてしまうと、何十年もの間美術愛好家の

の眼から遠ざけられてしまう。学生のために、行方知れずになる絵画の記録を残す方法は、作品の複製画像を作ることだが、ほとんどはそれも叶わないので作品について記述することである。」²⁸⁾と述べてレゾネの出版の動機とともに、二次資料としての写真の役割を位置づけている。

また、デ・フロートの遺贈した資料には、約2百万点のインデックス・カードが付されていた。このインデックス・カードがRKDのドキュメンテーションの基礎となったのであり、現在も HdG-fiches system (ホフステーデ・デ・フロートのカード・システム) として、アーカイブ部門では検索のために使用されている。このカード・システムは、デ・フロートが1891年に書き上げた、アルノルト・ホウブラーケン (Arnold Houbraken, 1660-1719) の作家伝『ネーデルランドの画家および女流画家の大劇場』の重要性を説いた博士論文²⁹⁾の際に用いたものであり、その後のヨーロッパ全般にわたるオランダ絵画の調査や、古いオークション・カタログの調査により膨大な数のカードが蓄積されてきた。

4.2. ルフトとRKD

デ・フロートがRKDの種を蒔いたとしたら、フリッツ・ルフトはすぐさまRKDの資料に豊かな多様性をもたせることで、その枝葉を伸ばすことに貢献したと言えるのではないだろうか。

同じ1932年、ルフトは主にオランダ以外の外国の美術を中心とした約10万点の写真・リプロダクションを寄贈した。これによってRKDは創立後1年もたたないうちに、一挙に20万点の写真・リプロダクションを所蔵することになったばかりでなく、RKDがオランダ以外の美術資料を収集するきっかけとなったのである。創立時の館長で、オランダ美術の研究者ハンス・シュナイダー (Hans Schneider) は、1932年の *Annual Report* で、オランダやフランドルの美術以外にドキュメンテーションの内容を拡大すると、RKDの特色が薄められてしまう、と警告した³⁰⁾。しかし、これ以降、外国の絵画や素描の写真・リプロダクションは順調に増え続け、1947年にはオラ

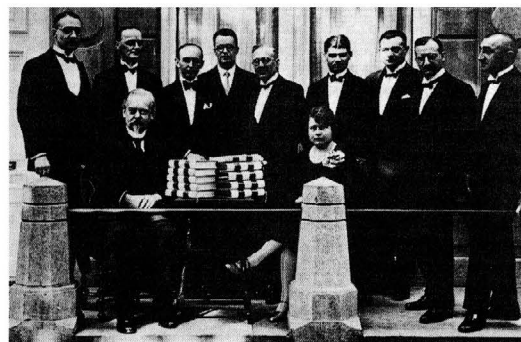


fig.6 デ・フロート (前列左端) とアシスタントとして働いた若い研究者たち。Catalogue・レゾネが完成した祝賀会と思われる。

ンダ美術と外国美術との相互の影響関係における研究を主な目的として、外国の美術部門が独立した。

現在ではロンドンのコンウェイ・ライブラリのマイクロフィッシュ・コレクション (*The Conway Library: Photographic Research Library of Art History*) の彫刻の部や、イタリア・ルネサンス美術に関するベレンソンの写真アーカイブの複製を含め、オランダ以外の中世から現代までの西洋美術に関する写真・リプロダクションは、およそ150万点である。

もうひとつ、ルフトが貢献したセクションに素描部門がある。素描の写真は初代館長のシュナイダーが最初に寄贈したのだが、すぐ後に、すでに素描のコレクターとして有名だったルフトから、主題別のインデックス・カードを付した多くの重要な画像資料と、レンブラントとレンブラント・スクールの素描に関する大量の貴重な研究資料が贈られた。また、ルフトは、RKDのためにスイスのゲルンシェイム社が毎年およそ3,800点づつ分売する、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアの各美術館やプライベート・コレクションから撮影された西洋の作家の素描の写真全集 (*Gernsheim Corpus Photographicum of Drawings*) の購入代金を1953年から1968年まで15年間支払い続けた。

このほかにも、ルフトは2万2千冊のオークションカタログを寄贈し、彼の貴重な蔵書コレクション (Library) をRKDに永久に寄託したことは特筆に値する。ルフトは、17～18世紀の書物をよく収集していた。彼は書物は常に美術と相互に影響を与えあっている、ある特定の地域・時代の美術や作家を研究するためには、画家の挿絵の研究だけでなく、同時代の書物全般についても研究しなくてはならない、と考えていた³¹⁾。ルフトはアメリカでおこなった講演で³²⁾ RKDの創立のいきさつについて触れ、デ・フロートが貴重な研究資料を国家に遺贈した意義について述べながらも、「デ・フロート博士の蔵書には重要なものはなかったが、幸いにもその不足は、他の寄贈や寄託によってすぐに補われた」と、蔵書家として著名でもあった彼の蔵書コレクションを寄託した動機を語っている。

ルフトの寄贈に続いて、元マウリッツハイス館長であり、デ・フロートを17世紀オランダ美術の研究へと導いた、著名なレンブラント研究家ブレディウス (Abraham Bredius, 1855-1946) から未出版の貴重な原稿が寄贈されたほか、オランダの美術史家マルティン (Wilhelm Martin, 1876-1954)、ドイツの著名な美術史家フリートレンダー、RKDとマウリッツハイスの館長を勤めたファン・ヘルデル (Jan Gerrit van Gelder, 1903-1980) など多くの研究者や、作家、アート・ディーラー、コレクターが貴重な資料を寄贈した。この動きは現在も連綿と続いており、*Bulletin* の各号には寄贈による新収蔵資料の紹介欄がある。1995年法の改正により、RKDのコレクションは国の所有物だが、組織の運営は財団法人化された。

4.3. RKDのコレクションとその活動

4.3.1. 画像資料

RKDのコレクションのうちで、特に圧倒的なのは画像資料 (ほとんどは写真) の量と種類の多さである。現在は350万～400万点を所蔵しているが、これはロンドン大学のウィット・ライブラリ (Witt Library) やドイツの画像アーカイブ・フォト・マルブルク (Bildarchiv Foto Marburg) をしのぐ量である。実際、ウィット・ライブラリの約150万点の所蔵写真コレクションのマイクロフィッシュ (*Witt Library Photo Collection on Microfiche*. London: Courtauld Institute of Art, 1978) や、ドイツの中世から現代に至る美術をマイクロフィッシュにおさめたマルブルクのインデックス (*Marburger Index: Photographic Documentation of Art in Germany*. Munich: K.G.Saur, 1976+) 約93万点などもRKDのコレクションの一部として所蔵されている。

RKDの主な画像資料 (写真やリプロダクション) の内訳は、17世紀を中心とした15世紀から18世紀までのオランダの絵画、約60万点／15世紀から18世紀までのオランダとフランドルの画家の素描と版画、約31万点／19世紀のオランダとベルギーの美術、約60万点／20世紀のオランダとベルギーの美術、約60万点／中世から現在までの外国の美術、約150万点／イコノグラフィー関連約5万点／オランダのトポグラフィー関連約5万点／肖像画約6万点の図版やネガなどである。

4.3.2. 文献 (文書) 資料

アーカイブは、作家だけでなく、アーティスト・ソサエティや研究者、評論家、アート・ディーラー、コレクター、修復家など、現在350種のアーカイブを収蔵。

プレス・ドキュメンテーション部門では、主にオランダの美術関連の新聞記事200万点のほかに、プレス・リリース、展覧会の招待状、パンフレットなどのエフェメラも収蔵している。

ライブラリは、稀覯書、オークション・カタログ、展覧会図録を含む約41万冊を所蔵。オークション・カタログは、同じものを3冊受け入れ、2冊は画像資料として切り抜かれてファイルされ、1冊がライブラリに所蔵される。

4.3.3. プロジェクト

RKDは、作家名データベースの作成や画像資料のデジタル化などを積極的におこなっているが、その他RKDが関わっているさまざまなプロジェクトについて簡単に紹介したい。

• Visual Arts Network for the Exchange of Cultural Knowledge (Van Eyck project): ECから資金提供を受けているプロジェクトで、世界中の美術情報データベースに、研究者が言語やシステムの違いといった支障を感じずにアクセスできるようなワークステーションを確立することを目的としている。

- Project: 'Collectie Nederland' オランダのミュージアムやその他の公共機関(大学を含む)の所蔵品のユニオン・カタログ作成プロジェクト。
 - Jan Sluijters: Catalogue raisonné: モンドリアンと並んで重要なオランダの近代美術の創始者のカタログ・レゾネ制作プロジェクト。
 - Getty Provenance Index: 1982年にゲティ財団が始めた、西洋美術のコレクションの歴史情報データベース・プロジェクト。1996年にはCD-ROMが出された。RKDは、1993年から参加。
 - Art & Architecture Thesaurus(AAT) translation project: 同じくゲティ財団の始めた美術と建築における語彙統制プロジェクトのオランダ語への翻訳活動に RKDは1994年から参加。
 - Infrared Reflectography Research (IRR) Project: 'Underdrawing and Artistic Concept: Atelier Practices': 赤外線反射による絵画の下絵の研究プロジェクト。
- などである。

5. おわりに

ルフトから学ぶべきものは、実に多くあると思われる。現在の私たちは、インターネットなどのネットワーク・システムの大きな変革期にあり、コンピュータのスイッチを入れれば、必要な情報がすぐさま手に入るような幻想を抱きがちである。しかし実際は、情報が洪水のように氾濫していて、ただ漫然とインターネットの空間をさまざましても、大した情報は得られない。

ルフトが、コンピュータもなしに作成したレファレンス・ツールを見ると、テクノロジーの発展やネットワーク・システムの変革は大きな助けにはなるが、重要な情報の生成においては、フィールドワークのような形での、辛抱強い緻密な調査による情報の収集と蓄積と、個人の努力による知識や経験の深さに基づいた分析が基本であることには、変わりがないことを改めて認識させられる。

それでも現代では、情報の流通環境が大きく変わったことは感謝するべきである。それは、RKDの活動に見られるように、効率的な情報流通への努力がなされたからである。利用された情報は、社会の中で必ず新たな価値のある情報を生み出すものであり、特に学術情報においては、情報の利用者＝情報の生産者でもある。RKDが、ドキュメンテーション・センターとしてこれだけ大きく発展したのは、情報提供に積極的であった結果、利用者が感謝をこめて研究の成果としての文献を、あるいは趣旨に賛同する多くの人々が個人所有のアーカイブや蔵書などを寄贈し、ますます資料が充実して利用が増える、という循環のためであるだろう。そして資料の収集の努力と同時に、情報の提供や検索を可能にさせるのは、きちんとドキュメンテーション化していく個々の職員の地道なルーティン作業の結果によるものであり、このこ

とは、言葉では簡単であっても、予算や人員の不足などが背景としてあれば、その実現は必ずしも容易ではない。

1995年から財団法人化されたというが、RKDはさまざまなプロジェクトに見られるように、自館の活動だけでなく、RKDの持つ豊富な資料と情報処理における優れた技術力を、さらに国際的に提供しようとしている。今後の発展を願うと同時に、日本国内でも、このような活動が盛んになることを期待したい。

(なかむら せつこ プリヂストン美術館)

* オランダ語の固有名詞をカタカナ表記するにあたっては、日蘭学会の図書室にご教示いただきました。また国立西洋美術館図書室では、資料を閲覧させていただきました。この場を借りて心からお礼を申し上げます。

註:

1) Mizutani, T., and S. Nakamura. *Dutch Influence on the Reception and Development of Western-style Expression in Early Modern Japan*. Paper presented at Open session, IFLA Section of Art Libraries at Amsterdam, August 1998.

(インターネット上で全文の閲覧が可能。
<http://www.ifla.org/IV/ifla64/036-101e.htm>)

2) OKBN: Overlag Kunsthistorische Bibliotheken Nederland= ARLIS/NL: Art Libraries Society/ The Netherlands. 1982年に設立され、造形芸術や建築などの分野の資料を所蔵する約50機関が会員となっている。

3) RKDのインターネットのウェブサイトは
<http://www.rkd.nl/frame-e.htm>.
RKDの活動を紹介している文献に下記のものがある。

Stare, Jan H. E. van der. "Automation at the RKD: a short overview." *Art Libraries Journal*, vol.23, no.2(1998), pp.15-17.
 岩淵潤子「巨大な美術史情報サービス・プロバイダーとしてのRKD」『ファッションドキュメンテーション』7号(1998), pp.36-45.
 Appuhn-Radtke, Sibylle. "Das Rijksbureau voor Kunsthistorische Documentatie in Den Haag." *Kunstchronik*, vol.47, no.4(April 1994), pp.181-188.
 また1999年3月24日に国立西洋美術館で開催された講演会「オランダ美術史研究と情報処理」(RKDのヤン・ファン・デル・スタール氏とレイデルト・ファンケンブル氏による講演)は近いうちに報告書が出される予定。

4) フリッツ・ルフトの生涯に関しては以下の文献を参照した。
 Gelder, Jan Gerrit van. "Frits Lugt." (Obituaries) *The Burlington Magazine*, vol.112, no.812(Nov. 1970), pp.762-763.
 Sérullaz, Maurice. "Hommage à Frits Lugt." *La Revue du Louvre et des musées de France*, 21 année, no.1(1971), pp.39-44.
 Gelder, Jan Gerrit van. "In Memoriam Frits Lugt." In *Flemish Drawings of the Seventeenth Century from the Collection of Frits Lugt, Institut Néerlandais*. (exh. cat.: Victoria & Albert Museum, London; Institut Néerlandais, Paris; Kunstmuseum, Bern; Royal Library of Belgium, Brussels, 1972), pp.ix-xv.
 Editorial[Sutton, Denys]. "L'Amateur accompli: Frits Lugt." *Apollo*, vol.104, no.176(Oct. 1976), pp.242-249.
 Fontaine Verwey, Herman de la "Ex libris veteribus F. Lugt." *ibid.*, pp.282-289.
 Hasselt, Carlos van. "Introduction." In *Rembrandt and His Century: Dutch Drawings of the Seventeenth Century from the Collection of Frits Lugt, Institut Néerlandais*. (exh. cat.: The Pierpont Morgan Library, New York; Institut Néerlandais, Paris, 1977-1978), pp.ix-xiv.
 Gilbert, Creighton E. "Frits Lugt: a Life in Looking." *New Criticism*, vol.5, no.1(Sept. 1986), pp.29-33.
 Welling, Dolf. "Een geboren verzamelaar" (A born collector). *Tableau*(Amsterdam), vol.15, no.1(Sept. 1992), pp.96-101.
 Berge-Gerbaud, Mária van. "Lugt, Frits." In *The Dictionary of Art*, edited by Jane Turner. London: Macmillan, vol.19, 1996, pp.782-783.
 Kerkhof, Anneke. "The Dutch Library in Paris." *Art Libraries Journal*, vol.24, no.1(1999), pp.23-27.

5) 祖先はヤンツ(Jansz.)という名前だったが、1750年にルフトに変わった。記録でたどれる祖先のピーテル・ヤンツ(Pieter Jansz.)は1575年、アールメール(Aalmeer)で船大工をしていたという。(Editorial[Sutton], *op. cit.*, p.242)

6) 室内や風景なども描いていたが、動物画家として人気を得た。とりわけ馬を主題にしたものは高い評価を受け、ナポレオン3世により1855年のパリ万国博覧会に出品され、フランスでも名声を得た。(Jansen, J. "Verschuur, Wouterus." In *The Dictionary of Art*, vol.32, p.375)

7) Gelder(1972), *op. cit.*, p.ix. なお、70年後にルフトの追悼記事で、オランダ国立博物館の版画室は、まだ素描目録を出版していないと指摘された。(Gelder(1970), *op. cit.*, p.762.) 実際は1942年に第1巻としてレンブラントとレンブラント・スクールの素描の目録が出されたが、以後中断していた。記事の効果があつたのか78年に第2巻が刊行され、98年の第6巻まで続いている。

8) Editorial[Sutton], *op. cit.*, p.243. 版画商であり、約9,400点の素描コレクターでもあり、サヴォイア家のウジェーヌ王子(Prince Eugene of Savoy)所蔵の版画目録の監修者でもあったマリエットは、作品の来歴に興味を持ち、1741年に開催されたビエール・クロ

ザ(Pierre Crozat, 1665-1740)の素描コレクションのオークションの折り、詳細なカタログを制作し、初めて作品のアトリビューションの証明に来歴を使用した。(Walsh, Amy L. "Marianne: (4) Pierre-Jean Mariette." In *The Dictionary of Art*, vol.20, pp.416-418)なお、約500点の絵画、1万9000点の素描や多くの工芸品から成っていたクロザ・コレクションは、後にその一部がエカテリーナ2世の手に渡り、エルミタージュ美術館のコレクションの重要な柱となった。ルフトがマリエットから受けた影響については、Bacou, Roseline. "Bolognese Drawings of the Seventeenth Century." *Apollo*, vol.104, no.177(Nov. 1976), pp.382-387を参照。またルフトは、ルーヴル美術館で開催されたマリエットの展覧会図録に序文を寄せている。("Introduction." In *Le Cabinet d'un Grand Amateur, P. J. Mariette, 1694-1774*. Paris: Musée du Louvre, 1967, pp.13-15)

9) Lugt, Frits. *Rembrandt 1899: een biografie=une biographie =a biography*. Paris: Fondation Custodia, 1997. 124p.

10) Fontaine Verwey, *op. cit.*, p.282.

11) Hasselt, *op. cit.*, p.ix-x. ルフトの素描コレクションは、質や主題の選択だけでなく、保存の状態に至るまで、明らかにマリイからの影響が見られるという。1910年に、マリイがその優れた素描コレクションのうち、およそ1,500点を手放さざるを得なくなった時、ルフトは、ミュラーのメンシングと共に落ちしようとして失敗した。落ちしたのは有名なコレクター、ジョン・ピアポント・モーガン(John Pierpont Morgan, 1837-1913)であり、これによりオルド・マスターから19世紀までのヨーロッパの体系的な素描コレクションが、初めて米国の美術館に収蔵されることになった。なお、ルフトは、マリイの死の翌年にクリスティーズのオークションで、マリイ・コレクションの残り数点を入手した。

12) Haamstee, F van. [pseud. Frits Lugt] "J. B. Jongkind: Naar aanleiding van een tentoonstelling zijner werken bij den heer A. Preyer te Amsterdam." *Onze Kunst*, 3(Mar. 1904), pp.129-136.

13) Gelder(1972), *op. cit.*, p.xiv.

14) Hasselt, *op. cit.*, pp.xi-xii. ルフトは特にジョン・ピアポント・モーガンが設立したピアポント・モーガン・ライブラリ(The Pierpont Morgan Library)に関心を持っていたという。

15) 素描や版画以外のルフトのコレクションについてはApollo, vol.104, no.176(Oct. 1976)所収の下記の文献を参照。
 Reitsma, Ella. "A Connoisseur's Collection of Paintings." pp.250-257; Skelton, Robert. "Faces of Indian Painting." pp.266-273; Reynolds, Graham. "Portrait Miniatures from Holbein to Augustin." pp.274-281; Fontaine Verwey, *op. cit.*, pp.282-289; Chu, Petra ten-Doesschate. "Unsuspected Pleasures in Artists' Letters." pp.298-305.

16) Jacoby, Beverley Schreiber. "Marks: 5. Collector's." In *The Dictionary of Art*, vol.20, pp.445-446.

17) *Art Sales Catalogues, 1600-1825*. Leiden: Inter Documentation Company (IDC), 1989; *Art Sales Catalogues, 1826-1860*, 1997.

18) Gelder(1972), *op. cit.*, p.xi.

19) 今回ホフステーデ・デ・フロートに関してはここでは詳細には触れない。博士の生涯については、下記の文献を参照されたい。

Gelder, H.E. van. *Levensbericht van Dr C. Hofstede de Groot, met bibliografie samengesteld door H. Gerson*. Leiden, 1931. Eng. trans., "Dr. C. Hofstede de Groot, 1863-1930." In *Dutch Drawings from the Collection of Dr. C. Hofstede de Groot*, by J. Bolton. Utrecht :Oosthoek, 1967, pp.17-36.

20) Hofstede de Groot, Cornelis. *Beschreibendes und kritisches Verzeichnis der Werke des hervorragendsten holländischen Malers des XVII. Jahrhunderts*. 10 vols. Esslingen: Neff, 1907-1928. Eng. trans., *A Catalogue Raisonné of the Works of the Most Eminent Dutch Painters of the Seventeenth Century*. 8 vols. London: Macmillan, 1908-1927. 但しドイツ語版のvol.9-10は未所収。Reprint, Teaneck, NJ: Somerset House; Cambridge: Chadwyck-Healey, 1976. 全10巻を3分冊に収めた縮小版。vol.1-8は英語, vol.9-10はドイツ語。図版なし。

21) Gelder, H. E. van [Eng. trans.], *op. cit.*, p.28.

22) 美術研究における写真を含むリプロダクションの利用と論争については下記の文献を参照。Freitag, Wolfgang M. "Art Reproductions in the Library: Notes on Their History and Use." In *The Documented Image: Visions in Art History*, edited by Gabriel P. Weisberg and Laurinda S. Dixon. Syracuse: Syracuse University Press, 1987, pp.349-363.

23) リオネロ・ヴェントゥーリ著, 辻茂訳『美術批評史』みすず書房, 1990, p.227.

24) Freitag, *op. cit.*, p.354.

25) *ibid.*, pp.354-355.

26) ベレンソンの写真コレクションが特に貴重なのは、多くの写真の裏にベレンソン自身の細かい手書きのメモがあること、作品が修復される前に撮られた写真が多いことである。また鑑定家として著名であったベレンソンの元に送られてきた写真のうち、出版物にも掲載されぬまま、破壊されたり行方不明になった作品や、プライベート・コレクターたちの秘蔵作品の写真が多くある。ベレンソンはヴィラ・イ・タッティを母校であるハーヴァード大学に遺贈することを申し出て、現在は大学のイタリア・ルネサンス研究センターとして、図書約11万冊、逐次刊行物約1,000種、写真資料は約30万点を所蔵している。希望者は誰でも、修士以上であれば利用できる。またモノクロ写真プリントの複製は他館でも入手可能。詳しくは Faigel, Martin. "Berenson Library." In *Encyclopedia of Library and Information Science*, edited by Allen Kent and Harold Lancour, vol.2, 1969, pp.335-343. を参照。(インターネットのurlは <http://www.vit.firenze.it/>)

27) Friedländer, Max J. *On Art and Connoisseurship*, trans. Tancred Borenius. Boston: Beacon Press, 1960, pp.197-199.

28) Hofstede de Groot (Eng. trans.), *op. cit.*, p.v.

29) Hofstede de Groot, Cornelis. *Arnold Houbraken in seiner Bedeutung für die holländische Kunstgeschichte: zugleich eine Quellenkritik der Houbrakenschen 'Groote Schouburgh.'* The Hague: M. Nijhoff, 1891. Reprint, *Arnold Houbraken und seine 'Groote Schouburgh.'* Vol.1 of *Quellenstudien zur holländischen Kunstgeschichte*. The Hague: M. Nijhoff, 1893. なお「ネーデルランドの画家および女流画家の大劇場」の書名は下記の文献で使われた訳語を使用した。ウード・クルターマン著, 勝國典, 高阪一治訳『美術史学の歴史』中央公論美術出版, 1996, p.45.

30) <http://www.rkd.nl/dprmnts/bui-e.htm>

31) Fontaine Verwey, *op. cit.*, p.283. 例えばルフトは、16世紀末から17世紀にかけて黄金期をむかえたオランダのカリグラフィーにも関心を示し、習字手本書を蒐集していた。16世紀のイタリアから北方に広がってきた人文主義の結果として、ラテン語以外の言語でも文書が書かれるようになり、17世紀末に書体が統一されるようになるまでの間、多種多様の新しい書体が出現した。ルフトの蒐集した習字手本書は、オランダにおける書体の発展を調べることができるほど充実したコレクションであるという。(ibid., p.286) また、こうしたアラベスクの花文字の習字手本書は、カリグラファーだけでなく、銅版彫師の卓抜な技術の成果でもあった。ルフトの書体に対する関心は、やがて画家の自筆文書へとむかっていったようである。ルフトは、画家の筆蹟の特徴と、素描における描線との間に類似点を見だしていた。とりわけ書簡は、素描と同じように画家の内面を明らかにするものだと考えていたルフトは、内容(主題)と形(筆蹟/描線)とに同等の関心を払っていた。クストディア財団には、ルネサンス以降の画家の自筆文書(ほとんどは書簡)15,000点以上が収蔵されている。(Chu, *op. cit.*, p.298)

32) Lugt, Frits. "History of Art." In *The Contribution of Holland to the Sciences: a Symposium*, edited by A. J. Barnouw and B. Landheer. New York: Querido, 1943, pp.179-211. (RKDについて触れているのはpp.209-211) ルフトはこれの中で、1880年頃から第2次世界大戦前までのおよそ半世紀余りの間に、オランダの美術研究に貢献した数多くの研究者を紹介し、美術研究者の育成についても述べている。大学でのスライドや写真を使用した授業や、文献からだけで研究者が育つのではなく、学位よりも自らの努力や「コネスルシップ」がいかに大切であるかを強調している(ibid., pp.181-182, 185-186)ののだが、これはルフトの生涯を通じての信念であっただろう。

かつて、ミューラーを辞してまもない30代のルフトは、同じ様な主張を公に述べたことがあった。1911年にオランダの古美術協会(Nederlandsche Oudheidkundige Bond)は、博物館・美術館の組織運営についての検討委員会を設立し、ミュージアムを美術館と歴史博物館とに分離する必要性や、国立博物館と地方の博物館との関係の見直し、館長の養成制度などの問題を討議し、1918年に『ミュージアムの運営管理と改革について』と題した報告書を作成した。その報告書に対して、ルフトはすぐに美術館行政の現状を批判した『国家の美術品管理について』と題する反論を提出したのである。中でも館長の養成制度について、館長として相応しいのは制度としての教育を受けたかどうかではなく実力や指導力であると述べた。ルフトの報告書は大きな議論と反発を巻き起こし、彼をオランダの美術界から遠ざける原因となった。この件については、Meijers, Debora J. "De democratisering van schoonheid: plannen voor museumvernieuwingen in Nederland 1918-1921" (The democratization of beauty: plans for museum reform in the Netherlands, 1918-1921). *Nederlands Kunsthistorisch Jaarboek*, vol.28 (1977), pp.55-104. に詳しい。一般人が利用できるドキュメンテーション・センターであるRKDに対して、ルフトが援助を続けてきた動機のひとつをここに見ることが出来るかも知れない。